

「腎臓疾患手記」 西前 忠久 48 歳

2013 年 5 月 30 日

松本先生から、手記を書きなさいとのお話をいただきました。

腎炎の症状は、今は収まり、現在自分は腎臓疾患の患者だったという自覚すらありません。しかし、手記を書くには、まだ時期尚早だと感じていました。ですから一度はお断りしたのです。

(この方も 1～2 年前に腎炎を私の漢方治療で治したのですが、実は私が治したわけではないのです。漢方は医薬品というのにはもったいなすぎる最高の食べ物といってもよいぐらいなのです。なぜならば現代の医薬品は免疫の働き、つまり免疫の遺伝子の発現を抑えて、異物との戦いを一時的には消し去るのですが、実は元の病気はどんどんひどくなる準備をしているだけなのです。ましてや 38 億年かかって進化した免疫の遺伝子は神なる存在ですから、人間の猿知恵で神の知恵を裏切るなどということは許されるわけではないのです。あらゆる症状はあらゆる病気は起こるべくして起こったにもかかわらず、現代の医学は全て免疫の遺伝子が悪いと決め付けて病気を作り続けているだけです。

つまりそのような免疫の働きを抑える薬をやめると免疫の遺伝子の修復が行われ、再びリバウンドというはじめよりも激しい症状がみられます。つまりリバウンドという医原病が出てしまうので現代の医療は全く意味がないのです。確かに死ぬときにはステロイドは使うべきでしょうが、病気を治すためにはステロイドは全く百害あって一利もないのです。それではどんな薬が腎炎に使うべきでしょうか？ここに漢方生薬が登場してくるのです。

漢方生薬は植物から採取したものであり、従って植物が作る栄養素と同時に、植物自身が敵から身を守るために作り上げた免疫成分がたっぷり入っていますから、医薬品と同列に並べるどころではないのです。漢方生薬を医薬品というのは植物のありがたみを現代人は誰も知らないので、漢方生薬を医薬品のひとつと考えているのです。昔から漢方生薬は医食同源と言われましたが、それ以上の存在なのです。つまり古代の中国人は免疫の意味をまるで知らなかったのにもかかわらず、漢方生薬を普通の食べ物以上に優れたものであり、病気も治すことができることを発見したのです。これが中国医学の出発点であったのです。

皆さんご存知だと思いますが、この世に植物がなければ動物の全てが死に絶えてしまいます。なぜならば植物を食べなければ私たちは 5 大栄養素の全てを手に入れることができ

なくなってしまうからです。愚かな人は言うでしょう。「牛や豚を食べれば良いじゃないか」と。「あなたはアホですか？」と私は言いたいのです。牛や豚や鶏がどこから栄養を取っているのかご存知ですか？まさに植物なのです。この世に動物は植物なしに生きられないのみならず、古代の中国人は免疫の意味はもとより、植物の遺伝子も人間の遺伝子と同じ成り立ちであることを知らないで、何とか訳の分からない病気を治すために植物の中に薬草を求め、漢方医学を樹立したのです。

皆さん、なぜ植物にも毒が入っているかをご存知ですか？それは植物が細菌やウイルスやカビや動物に食べられたくないためなのです。賢い中国人は人間を殺すような毒を持っている植物を排除し、原理を知らないで細菌やウイルスやカビを増殖させない植物を薬草として経験的に選び出して漢方医学の生薬として 2000 年以上も使ってきたのです。

腎炎も、いわば人体に入った様々な異物と腎臓の結合組織や細胞で戦ったときに見られる炎症のひとつなのです。この炎症を現代はステロイドで免疫の遺伝子を変えることによって一時的に止めることはできるのですが、一生やめることができなくなってしまうのです。なぜならば、やめてしまうと再び遺伝子を修復するためのリバウンドが出てしまうからです。だからこそ彼は遠路から私の漢方治療を求めて受診され、ほとんどデータも良くなり、普通の生活ができるようになったので、手記を書いて下さいとお願いしたのです。しかし彼は書かなかったものですから、2 年近く経った後にやはり別の病気で私を必要としたので、再び受診されるときに「つべこべ言わずに手記を書け、書く気がなければ二度とくることはない！」と言いつつ放ったのです。「他の病院に行けば良いでしょう」という嫌味なことまで言ったのです。

現代の病気で普通の愚かな大学病院の教授先生方は膠原病が難病だと言いまわっています。何も難しいことはないのですが、実は最後に残された膠原病の中で腎炎が一番治すのに時間がかかるのです。もちろん腎炎を治すのも自分の免疫の遺伝子ですが、一度腎臓のどこかに炎症が起これば、それを修復することが一番難しいからです。なぜでしょうか？ひとつは腎臓の機能が複雑かつ精巧であり、どの組織の何万倍も多く毛細血管から成り立っており、この毛細血管を通じて血中に溶けている老廃物や異物を濾過して排除する場所であるからです。この濾過装置を糸球体といいます。ひとつの腎臓に約 100 万個ありますから、2 つの腎臓で約 200 万個あるのです。ひとたびこの腎臓の糸球体に一箇所でも傷がいくと、それを修復することが極めて難しいのです。その理由をゆっくり考えていきましょう。

この糸球体は毛細血管の“毛まり”のような塊であり、この糸球体の毛細血管の基底膜で血漿成分を限外濾過するのです。この限外濾過というのは、膜の両面に一定の圧力差が

あるときに、高い圧の側から低い圧の側へと溶液中の粒子が分散して染み出すことです。膜を通して粒子状のゴミや不純物を取り除かれるので濾過といいます。糸球体の毛細血管の水に溶けている分子量の低い物質（溶質）が血管から取り除かれます。生体内ではあらゆる毛細血管と、この腎糸球体の毛細血管で限外濾過が行われています。

どのようにして腎糸球体の毛細血管の中の粒子が濾過されるかをもう少し説明しましょう。実はこの糸球体のひとつひとつはボーマン嚢という袋に包まれています。このボーマン嚢という袋の中に糸球体の毛細血管から濾過されて染み出てきた老廃物や濾過された物質が貯められる所です。この袋の中をボーマン腔といいます。この腔は圧力がほとんどありませんから、このボーマン腔よりも糸球体の毛細血管の中の水の圧力の方がはるかに強いので、この毛細血管からボーマン腔に血液を濾過することが可能となるのです。もちろん毛細血管の水の圧力が押し出す力となりますが、逆にその押し出す力を弱める力があります。それが血漿膠質浸透圧と呼ばれるものであります。

血漿膠質浸透圧とは何でしょうか？皆さん、アルブミンというタンパクはたびたび耳にされることがあるでしょう。血中に多く含まれているこのアルブミンが少なくなると、下肢や足がむくむという話を聞いたことがあるでしょう。このアルブミンは血管にあるときに血管外の組織から水を血管内に引く力があるのです。この力を引く力のことを血漿膠質浸透圧というのです。従って糸球体の毛細血管にはアルブミンが多くあるので、水を引く力が強いのです。従って糸球体の毛細血管からボーマン腔に水を押し出そうとする力は、このアルブミンの血漿膠質浸透圧を差し引く必要があるのです。差し引かれても押し出す力の方が強いので、これが糸球体における血漿の限外濾過の力となるのです。大体お分かりになりましたか？

このような限外濾過によってボーマン腔に貯められたものが尿のもとであり、原尿といいます。原尿は別名、糸球体濾過液といい、糸球体において血液から濾過された成分であり、1日に100リットル作られますが、そのうち99%は尿細管で再吸収を受け、尿にはたった1～2%程度しか排泄されないのです。普通の人の1日の尿量は1.5リットルぐらいです。このように、まさに腎臓はこの原尿を作る仕事が一番大事なのです。ただこの原尿そのものが尿ではないのです。この原尿の中に含まれている人体に必要な物質が、再び尿細管というところで吸収され、後の残りの老廃物がいわゆる尿、つまり小便となるのです。

それでは腎臓が悪いときにむくみが見られるのですが、それについても簡単に説明しましょう。むくみは医学用語で浮腫といいます。ときには水腫ともいいます。細胞外にたまる液体が増加した状態です。人体には60兆個の細胞がありますが、その外というのは結合組織であり、結合組織のことを間質といい、ときに組織といいます。従って浮腫は結合組

織に増加して貯留した水分がむくみとして観察されるのです。腎性の浮腫というのは、結局原尿が作られにくくなることです。腎臓の糸球体が傷つき、先ほど述べたアルブミンが糸球体の毛細血管からもれ出てしまいます。するとこのアルブミンの血漿膠質浸透圧が減っていきます。組織、特に下肢の皮膚の組織にある水分を毛細血管内に引き入れる力が落ちるので浮腫が出るのです。もちろん他にも浮腫の原因は色々ありますが、ほとんどの浮腫の原因はアルブミンをはじめとする低タンパク血症によるものと考えればいいのです。

腎臓の構造の全てを語るのは難しすぎますが、少しふれましょう。ボーマン嚢と丸まった毛細血管の塊である糸球体のふたつを腎小体といいます。昔はこの腎小体をマルピギー小体と呼んでいました。皆さん、ネフローゼという言葉聞いたことがあるでしょう。ネフローゼという言葉はどこから生まれたかご存知ですか？ネフロンという言葉から生まれました。ネフロンは今述べた腎小体と尿細管からできているのです。つまり血液を濾過する仕事をしている腎臓の形態的・機能的な単位をネフロンと呼んでいるのです。ネフローゼというのは、尿中に大量の血清タンパク成分がもれ出るときに見られる病気のことをいっているのです。ネフロン、つまり腎小体と尿細管に病気がある状態をネフローゼといっているのです。もう一度復習しましょう。腎小体は糸球体とボーマン嚢から成り立っています。ネフロンは糸球体とボーマン嚢と尿細管から成り立っています。医学は専門術語が多いのでとっつきが悪いですが、分かれば何も難しい学問ではありません。

さらに一言加えましょう。実は腎小体を漠然と糸球体と呼ぶことがあり、さらに本来の糸球体を糸球体係蹄と呼ぶことがあることも知っておいてください。皆さん、糸球体を糸球体係蹄となぜ呼ぶのか説明しましょう。係蹄の意味は、中国で罝の一種を意味しました。ひもや縄などを輪状にして餌を中に置き、鳥獣を誘い、その足に縄を絡ませ締めて捕える仕掛けを係蹄といったのです。つまり糸球体は、まるで毛細血管を縄と考えると、それをぐるぐる巻きにした毛細血管の集まりという意味で、糸球体の特徴を特に強調して示す言葉が糸球体係蹄であります。係蹄という難しい言葉は昔の偉い医学者は用いたのですが、もっと分かりやすくは“糸球体は毛細血管の糸だま”とか“糸球体は毛細血管の毛まり”と言った方がぴったりするのですが、医学を庶民から遠ざけるために作った言葉なのでしょう。今も昔も医者はお高くとまっていたようですね、アッハッハ！医学はこのような難しい医学術語の定義をマスターすることが一番大事なのです。

この約 200 万個のひとつひとつの糸球体に一本ずつ輸入動脈が入り、糸球体毛細血管網を作り、この毛細血管で限外濾過によって血液を濾過し、原尿を作り、ボーマン腔に溜まった原尿は尿細管で原尿の中にある必要な物質を再び血管に戻します。濾過の仕事を終えた糸球体毛細血管は再び集まって一本の糸球体輸出動脈となり、糸球体から出て行くのです。

さあ、これからは腎臓の膠原病である腎炎についてお話ししましょう。糸球体腎炎は、普通には腎炎と呼ばれますが、この病気の本質は糸球体の血液の濾過の仕事ができなくなった状態です。腎炎とはなんと漠然とした言葉でしょう。とどのつまりは、原理的には人体にとって異物である化学物質を腎臓の結合組織で IgG を用いて排除する戦いにおいて見られる炎症を腎炎といっているのです。ちょうど関節の結合組織で化学物質を IgG で排除する戦いを関節炎とか関節リウマチというのと同じことです。従って糸球体腎炎とは、正しくは腎臓の糸球体の間質で異物と戦うときに見られる糸球体間質炎というべきものです。

さて、糸球体の間質とは何でしょうか？先ほど述べたように、糸球体は大部分が毛細血管から成り立っています。従ってこの毛細血管を固定したり支持したりするために、この無数の毛細血管と毛細血管との間に、それらを結びつけ、かつ支持する結合組織が必要となります。この糸球体の結合組織をメサンギウムといいます。このメサンギウムは糸球体の中心にあり、血管の間にあるので血管間膜ということもあります。このメサンギウムという糸球体の間質には、メサンギウム細胞がたくさんいます。このメサンギウム細胞は、皮膚の結合組織に見られる線維芽細胞とよく似た性質を持ち、メサンギウムという間質を作るために膠原線維（コラーゲン）を分泌します。と同時に、このメサンギウム細胞は皮膚の結合組織に見られるランゲルハンス細胞と呼ばれる免疫細胞や、かつ大食細胞に似ているところもあります。つまりメサンギウム細胞は糸球体の構造を維持するほか、食作用、コラーゲン産生作用、さらに代謝産物の移送などもしているのです。

それでは、どのようにして糸球体に運ばれた異物が、どのようにして処理されるのかを考えてみましょう。今述べたように、メサンギウム細胞は大食細胞に似た物質処理能を有しており、異物の貪食と処理を行い、同時に糸球体外に異物を排除していると考えられ、糸球体の異物排出機構の仕事をやっております。糸球体毛細血管から出た異物を取り込んだメサンギウム細胞は、毛細血管から大食細胞になる単球を寄せ集め、炎症を起こします。異物を取り込んだ大食細胞は TNF というサイトカインを作り出します。かつ大食細胞は化学物質を溶かしきれないので、様々な強力な酵素や化学物質や、同時に殺しきれない異物である化学物質をも吐き出して、メサンギウムとよばれる間質を破壊してしまいます。すると、この炎症が糸球体の毛細血管の基底膜にまで波及し、基底膜が破壊されます。すると、破壊された毛細血管の基底膜を通して、様々な種類の高分子のタンパクや血球がもれ出てきます。これが腎炎の始まりであります。すぐに毛細血管のほころびが修復されると一過性の急性腎炎で終わりますが、同じ化学物質が続けて入ってくると、この炎症がいつまでも続きます。これが慢性腎炎となるのです。

腎炎のタイプには色々あります。いずれにしろ人間にとって異物を糸球体の結合組織であるメサンギウムで排除しようとする炎症が出発点となっており、その原因物質とか、炎症を起こす糸球体の広がり、数、持続期間により、さらに炎症を止める薬の強さや、薬の量、使用期間などによって、様々に傷が治らない状態によって、さらに腎臓の組織検査の力も借りて、数多くの病名がつけられるのです。全てを挙げてみましょう。IgA 腎症、壊死性糸球体腎炎、急速進行性糸球体腎炎、巣状糸球体腎炎、増殖性糸球体腎炎、中毒性腎症、肉芽腫性糸球体腎炎、膜性増殖性糸球体腎炎、慢性糸球体腎炎、ループス腎炎、MRSA(マーズ)腎炎などと名づけられるのです。

次回は若い人によく見られる IgA 腎症について詳しく述べましょう。乞うご期待！

今日はここまでです。2013/06/13

IgA 腎症は、別名、IgA メサンギウム腎症とか、IgA 腎炎とか、免疫グロブリン A 腎症とか、ベルジェ病ともいいます。フランスのベルジェが 1968 年に初めて報告しました。慢性に経過する糸球体腎炎の中で、蛍光抗体法により、IgA がメサンギウムに沈着していることが証明されたのですが、同時に補体の C3 も沈着することが分かりました。(補体についてはいずれ必ず詳しく書きます。)上に述べたように、糸球体間質といわれるメサンギウム結合組織領域を中心に、IgA という抗体が沈着し、メサンギウム細胞が増え、さらにメサンギウム細胞以外にも大食細胞などの様々な炎症細胞も増えているのです。

IgA 抗体は本来、粘膜抗体といわれるように、粘膜にしか見られないのに、どうして粘膜のない腎臓のメサンギウムに IgA が沈着しているのが見られるのでしょうか？さらに IgA は抗体の中で最も炎症を起こしにくい抗体といわれてきたにもかかわらず、なぜ腎炎を起こすのでしょうか？つまり IgA は中和抗体といって、ウイルスにしろ、細菌にしろ、敵をつかまえて自分自身と敵を便や小便や痰や涙などに流し去るだけであると考えられている最も安全な抗体であるにもかかわらず、なぜ腎臓に炎症を起こし障害を残すのでしょうか？説明しましょう。

その答えの中心はただひとつ、実は IgA 抗体にはしっぽに補体がつく IgA があることが分かったのです。この補体が大食細胞や好中球がひっついて炎症を起こしてしまうのです。皆さんご存知のように、抗体は Y 字の形をしています。上の 2 本の手で敵を捕まえ、一本足に様々な炎症を起こす補体や大食細胞がつきます。IgA 抗体のしっぽには大食細胞は絶対につかないのですが、補体はつくことができるのです。だからこそ腎臓のメサンギウムに補体の C3 が沈着しているのです。この補体の C3 が IgA にひっつくと、オプソニン作用(味付け作用)が生まれ、この味に憧れて大食細胞や好中球が食べにかかるのです。これが答えなのです。つまり IgA に補体がひっつくと、この補体に大食細胞がひっついて、IgA

抗体の両手で捕まえている敵を食べるのですが、食したハプテン（化学物質）とキャリアタンパクの複合体は殺しきれないのでメサングウムに吐き出します。このときに貪食細胞である好中球や大食細胞は強力な活性酸素や化学物質や酵素を吐き出し、そのメサングウム（糸球体間質）の組織を傷つけ、と同時に近接する糸球体の毛細血管も傷つけて、その結果分子量の小さいアルブミンのみならず、大きな様々なタンパクや血球もボーマン腔に、尿細管で再吸収されきれないほどにもれ出てしまい、最後は尿に出てしまい、尿検査で蛋白や潜血が尿に出てしまうのです。一度傷ついた毛細血管は修復することが非常に難しいのです。これについて説明しましょう。

ひとつの腎臓に約 100 万個もある糸球体の毛細血管は、普通の血管とは構造が全く異なります。というのは普通の血管は、まず動脈、小動脈、細動脈、毛細血管、細静脈、小静脈、静脈、とつながるのですが、糸球体の毛細血管は、輸入細動脈から始まり、毛細血管、毛細血管、毛細血管…と無限に繋がり、血液が濾過された最後に輸出細動脈となって出て行くのです。傷ついた毛細血管は、どの器官の毛細血管であろうとも、毛細血管を取り囲む結合組織が充分多くないと修復できにくいのです。なぜかという、毛細血管の細胞にしろ、他の全てのいかなる細胞も、まず細胞が定着する母地となる結合組織が絶対に必要であるのです。つまりまず正常な結合組織をつくって初めて正常な細胞が出来上がるのです。糸球体の間質（結合組織）は糸球体の中心に集中しているので、糸球体の中心に近い毛細血管は比較的早く修復できるのですが、糸球体の中心から離れた大部分の毛細血管はボーマン腔に連っており、ボーマン腔には間質がないので、ますますこれらの毛細血管の修復が難しくなるのです。つまりメサングウムの結合組織自身の修復はまだやりやすいのですが、糸球体の毛細血管の内細胞の組織修復が極めて難しいのです。さらに糸球体の支持組織であるメサングウムの細胞は、他の組織の支持組織にある線維芽細胞とは異なっているので、メサングウムの間質の修復が難しくなるのです。それについて説明しましょう。

毛細血管の修復にしろ、メサングウム組織の修復にしろ、まず肉芽組織が作られる必要があります。その後、膠原線維により欠損組織が置換される必要があります。ところが肉芽組織を作ってくれるメサングウム細胞は、上に述べたように、皮膚の結合組織に見られる線維芽細胞とよく似た性質を持っており、かつ間質（結合組織）を作るために膠原線維（コラーゲン）をも分泌できるのですが、と同時に、このメサングウム細胞は皮膚の結合組織に見られるランゲルハンス細胞と呼ばれる免疫細胞や、かつ大食細胞に似ているところもあります。つまりメサングウム細胞は糸球体の構造を維持しコラーゲン産生作用もあるので、メサングウム間質の修復もできるのですが、一方では免疫の食作用もあるので、炎症を高めてしまうのです。だからこそ一度傷ついたメサングウム間質は治りにくいのです。一言で言うと、メサングウム細胞は化学物質を処理すると炎症を起こしやすく、同時に炎

症の傷も治すという、相反する仕事を一人二役でやっている所以で傷が治りにくいのです。

それではなぜ IgA 腎症が細菌感染やウイルス感染の後に起こりやすいのでしょうか？さらに様々な食物タンパクが IgA 腎症を起こしやすいといわれていますが、なぜでしょうか？なぜ腸管や喉頭や気管支の粘膜で作られる IgA が粘膜とは全く関係ない腎臓に沈着するのでしょうか？このふたつの疑問を解きましょう。

粘膜で扁桃炎を起こすほどのウイルスや細菌の感染症が続くと、IgA 抗体も大量に作られます。その抗体の中に補体がひつつく IgA 抗体も生まれます。もちろん補体と結びつくが、まだ補体がついていない IgA 抗体もどんどん作られます。例えば、2 次リンパ組織である扁桃などで作られたこのような抗体は、必ず扁桃の輸出リンパ管に乗って扁桃のリンパ節から出て、最後は血管に入っていきます。リンパ管に流れている液体をリンパといいます。

どのようにリンパが血管に集まるかを説明しましょう。まず左右の下半身から集められたリンパと上半身の左側から集められたリンパは、胸管というリンパ管と一緒に集められ、左鎖骨下静脈に入って血管に戻っていきます。上半身の右側から来たリンパは、リンパ管に入り、右鎖骨下静脈に合流して心臓に戻ります。心臓に血液と共に戻ったリンパは心臓から出て行く血液と一緒に全身に運ばれ、腎臓にも行きます。腎臓に入った栄養血管は糸球体のメサンギウムに到達すると、栄養と共に補体のついた IgA に結びついた細菌やウイルスの断片を吐き出し、これを待ち構えていたメサンギウム細胞や大食細胞が食べます。このような細菌やウイルスの断片が大量でなければ、メサンギウム細胞や大食細胞は簡単に処理して溶かしきってくれるのですが、あまりに多いと炎症が続きます。このときにたまたま血管から化学物質（ハプテン）と結びついたキャリアタンパクの複合体と一緒に運ばれてくると、ここでときに細菌やウイルスの断片（エピトープ）と似たハプテンキャリアタンパクと IgA とがひつつくことがあります。これをクロスリアクションといいます。さらに補体も血流や糸球体の間質にいつも大量にありますから、ここでまた補体のついていない IgA がハプテンキャリアタンパク結合体にひっつきます。この補体を大食細胞やメサンギウム細胞が食べだします。ところがこのような化学物質は殺しきれないので、メサンギウムに吐き出してしまいます。大食細胞の強力な化学物質や酵素も共に吐き出され、ますますメサンギウム間質の炎症が起こり、近辺の毛細血管にもさらに炎症が波及し、毛細血管の内細胞がつぶれていきます。運の悪い人はこの悪循環を繰り返し、本格的な慢性腎炎へと徐々になっていくのです。あまりにも炎症がひどいと急性腎炎として治療されるのです。

ちょっとはしりましたが、次回はどうのように漢方が腎炎を治すのかについて述べま

す。)

今日はここまでです。2013/06/20

なぜお断りしたかと申しますと、今の自分には未だ、いただいた現象（この場合は腎臓疾患ですね。）、病気やけが、その他の自分に不利益になった事への、なぜそうなったのかの検証や、その貴重な現象に対しての心からのありがとうというものが殆ど皆無なためです。

頑固な自分が、自分で自分を遮っている、そんな感じです。どこまでも偉い自分が中心ですから、自分に起こる不利益な現象など認められないのです。

この偉い聳え立つ自分を崩すための腎臓疾患であったと、頭では分かるのですが、未だこの心で、ああそうだったと言えないのです。全くもって素直でない人間です。こんな心の状態ですから手記なんてとんでもない。今書いた所で、他の方への何の参考にもならないどころか、己の素晴らしさ偉さを表す事になるだけだとの自覚がありましたから、結論として、未だ手記を書けるような状態ではない。と言う気持ちでした。

しかし電話で松本先生から一喝されました。「ごちゃごちゃ言わんと書け！！」

久々の松本節がとても耳に心地良かったです。

分かりました。内容はどうあれ今の自分の心境で、とにかく短くとも綴ってみようと思いました。では暫しお付き合い下さい。

自分は2009年9月25日に松本医院の門を叩きましたが、松本医院にご縁をいただくまでの経過を、ざっと記して行きたいと思います。

私は東京で21年間、かなり特殊な職業についていました。長い下積み、厳しい修行。のし上がる為には尋常ではないエネルギーが要りました。そのエネルギーの中身は、人よりも何倍も奮励努力して、限界をつくらず、常に前を向いて・・・と如何にも素晴らしい文句を並べていますが、その実態は人への対抗心、絶対に負けぬという敵対心、更にその奥には敵対心を焚付ける怒りや恨みが物凄い勢いで渦巻いていたのです。そんな凄い思いが自分を突き動かしていました。訳の分からない自信に満ち溢れていました。

しかし、身体の方は、毎年毎年、病気や怪我がとても多かったです。調子が上がってくると大きなけが、や病気に見舞われる。こんな事が続いていました。その時はよくわからなかったのですが、今思うと、そりゃそうなるなあと納得します。

そんな生活を長く続けていましたが、2008年3月に、長年生活して来た東京から諸事情あって大阪に帰ってきました。大阪ではほぼ無いに等しいその職業での生活は難しい事は分かっておりましたので、知人に紹介いただき、43才にして人生初めての会社員生活を送ることになりました。

何しろ今までの、芸術系、技術系、職人気質の仕事ばかり 21 年間やってきた訳ですから、会社の社会やルールになかなか溶け込めませんでした。それだけでも十分に胃痛ものでしたが、書籍づくりの仕事柄、パソコンの超達人にならなければならないという、メールを打つのがやっとこさの自分にとっては、冗談抜きで正しく地獄でした。「拷問」という言葉がぴったりでした。

ページメーカー、フォトショップ、インデザイン、イラストレーター、ドリームなんちゃら……。嘗ての敵性国である横文字には元々アレルギーを起こす体質の上に、このややこしいソフトをクリアしていくなんて出来る相談じゃありません。

自分は、今までは全て自己責任で職人技の代償としてギャラをいただいていた。仕事も自分から売り込む事はなく、いただいた仕事をきっちり仕上げる。そういう受身の立場でいました。

しかし会社は商売ですから、お金のやり取り云々がまた苦痛でした。そのための上手な言い方、へりくだった物言い、全てはお金のため。それがうまく出来ないものは会社員としては失格。

兎に角、少しでも多くお金を分捕れ！には辟易しました。

とは言え、当時はもうこの仕事でしか食べていけないくらいに思っていましたから、自分で自分に与えるプレッシャーは相当なものでした。利益を利益を……。と。

数ヵ月後、会社の健康診断に行きました。今まで健康診断で引っかかった事は一度もありません。

今回もそんな軽い気持ちで受けに行きましたが、結果は予想外のものでした。腎臓に異常が出ている、大きな病院へ行って精密検査をするべし、でした。

2008 年 8 月に O 病院へ行きました。長時間病院に居るとそれだけで激疲れます。後日の検査結果は、詳しい病名は忘れましたが、なんちゃら慢性腎炎でした。そこで担当の医師が、「腎臓病は肺の病気と同じく一度壊れたら絶対に治りません！」「暫くは薬を飲んで様子が改善しない場合は手術を強くお勧めします！」「それもこれもあなたに透析生活をさせないためです！」等々熱く捲し立てられました。こちらは初めての内臓の病気で頭の中は余計な心配事で一杯なのに、そうやってどんどん畳み込んで来るので不安が募り、不安から恐怖に転移して行きました。

まずやったことは、食事療法でした。一日のタンパク質はこれくらいとか、自分にとってはとんでもない少量でした。2008 年 9 月からの半年間で簡単に 20 キロ落ちました。それまでは 80 キロ超えの立派な体格でしたが、60 まで落ちたのは高校生以来です。毎月 3 キロのペースでどんどん落ちていくので、一日に何度も貧血が起こり、頭が殆ど回らず、立ってられないほどの体力で、正直仕事なんて出来る状態ではありませんでした。同時に、こんなに簡単に体重が減っていくのが面白くて、ついでに人生未踏の 50 キロ台を！と目論んでいましたが、ここからが殆ど落ち

なくなりました。体調管理を含めて自分の肉体細胞が、自分の肉体を維持出来るように、コントロールしているのだなと感じました。すごいなあ、素直だなあと感心しました。日に何度も意識が飛びながらも、仕事はきちんとなんとかこなしていましたが、会社側は、どういう訳だか自分を解雇しようとまわりくどい方法で色々要求して来ました。会社としてはあくまで自主退社という形にしたかったのでしょう。要するに嫌味をして自分から辞めるという作戦です。これがまた TV ドラマみたいなあり得ない要求の連続でした。そこまでされて会社に残る理由は無かったけれど、こちらにも生活がありますし、出版の人間としてある程度育ってきた自覚もありましたから、会社側のやり方に対して気力も体力も無いのに、真っ向勝負で挑んでしまいました。余計に病気はよくなるはずがありません。最後はまさに自爆するようにして会社を辞めました。敵に突っ込んで行った特攻隊そのものでした。

会社を辞めて、暫くは治療に専念するつもりでいましたが、O 病院の先生は兎に角手術を！の手術一辺倒の方。最も自分は手術をしない！が方針でしたから、さてどうやって手術とは違う方法で治療をお願いするかなと思案して、ある日 O 病院へ行きますと、その先生は突然移動？で岡山へ飛ばされたとの事。

へー、そんなこともあるんだと半ば感心しながらも、丁度いい機会だから病院を変え、日本でも屈指の腎臓の専門の医師がいると言う K 病院で治療を受ける事にしました。

散々待つてようやく自分の診察。日本トップレベルのそのおばさん先生は開口一番、私に任せれば大丈夫と、胸を張っておっしゃいました。人に向かって言い切れるなんてなかなか出来る事ではありません。

凄い自信だなあと思いました。ではどんな治療をするのだろうと期待は膨らみます。おばさん先生は、まず入院の日取りを決めて入院していただき、3 日間ずっと点滴でステロイドを流し続けます。それから今後のベストな治療法を模索します。と、胸を張っておっしゃいました。入院の日取りもご自分のペースで決められました。

入院まで約一週間。入院すればステロイド地獄です。医学の素人の自分でもステロイドがどんなものかはだいたい分かります。ステロイドという名前自体の響きもドスの効いた化物みたいなもので好きではありません。「ステロイドン」って怪獣みたいでしょ。かと言って、もう他には病んだ腎臓を治療する手立ては何も無しです。

最早此れ迄。諦めの境地でいた入院 3 日前。親類の方から、偶然、本当に全くの偶然、松本医院のお話を聞く機会があり、さっそく自宅に帰って松本医院のホームページを読みました。

松本先生の書かれている内容が、どれもこれも分かりやすく染み込むように入ってきました。

自分の持つ免疫力を上げる事が大切。もう得納得！でした。

翌日、K 病院へ入院と治療を断る電話をしました。相手は直接には言わなかったけれど、「入院をやめるのは勝手だけど死んでも知らんよ。あんた死ぬよ。」そんな感じでした。

病院と言うところは、患者を脅して恐怖に陥れて、薬や医者に縋り付かせて恐怖でパニックの患者からお金をふんだくるのが商売なのだなと、この時よく分かりました。宗教団体もそんな感じでしょう。医者が教祖で、患者は信者。

支配する図式は全く同じです。

そして、2009年9月25日、(この日は自分の誕生日でもありました。)

松本医院にやって来ました。

扉を開けたら、すごい漢方薬の匂いがあたり一面に広がります。

なんという心地よさ！なんという優しい香り！線香や蠟燭の癒しの香りなんかとは違い、気持ちの奥底まで安心できるようなそんな香りに包まれて、その時、ここで改善するな・・・と思いました。

初めてお目にかかる松本先生は、今までの病院の先生とはイメージが全く異なる異色の方でした。なんちゅう声の大きい人だ！不安でいっぱい患者さん達はこの大音声でまず殆どが治療される筈です。

自分もそうでした。全く型破りのこの先生は、自分の中では黒澤明監督の「酔いどれ天使」に出てくる志村喬さんのアル中先生と、「赤ひげ」の三船敏郎さんの頑固先生を足して割ったような方だと思いました。

開口一番、私が治します！と。以前 K 病院で聞いた同じセリフでしたが、松本先生の音色には一緒に治しましょう。みたいな響きがあり、同じセリフを聞く側としても受け止め方が全く違いました。

この瞬間、西洋医学を捨てました。この先生のおっしゃることなら、常識的には無理難題でも素直に実践しようと決めました。

散々、一生治らないと脅かされ、またそれを信じ込んでしまっていた自分でしたが、帰りの東海道線のなかでは、何だかウキウキしていました。

会社との激闘で疲れきっていましたが、人生初のハローワークに通うことになり、仕事に追われるのも暫しやめて、漢方薬治療を始めました。心身ともに疲れきっていたので、ゆっくり休めるのは心地よかったです。

漢方薬を飲む度に、自然の持つ力というか、優しさというか、そういうものを感じながらいただいていた。飲みにくいとは全然感じませんでした。

腎臓疾患は、風邪もそうですが、インフルエンザは超ハイリスクだと以前聞かされており、正直冬の到来は、若干緊張感を持って身構えていました。

風邪は回避しましたが、12月についに恐れていたインフルエンザにかかってしまいました。物凄い出血です。尿の色が赤ではなく、焦げ茶色？いえ真っ黒。その色だけ見れば、死ぬかもねと思うくらいの迫力でした。

その旨、電話で松本先生に報告しましたが、「あんたそれで心配になって、西洋医学の所行くんやったら、わしゃかめへんで。あんたの勝手や！」と仰っていましたが、そんな訳ありません！ここで改善させると決めたのですから。ただ自分は報告をしただけです。時々

松本先生は熱くなって人の話を聞かずに熱血になることがあります。まあ、そこが松本ファンになる部分でもあるのですが。

数ヶ月に一回のペースで松本医院に通い、血液検査をしていただきましたが、検査をする度に、危険水域にあった数値が明らかに下がっていています。

目に見えてのこの結果ですから、治療も俄然楽しくなります。

そうこうしているうちに、私の家族にかなりシビアな問題が持ち上がりました。ここでは記述しませんが、言ってみれば生きるか死ぬかです。

自分は仕事と、生活の両面を支える感じで毎日が慌ただしかったです。

そんな事が数年続きました。ふと、そう言えば自分が腎臓疾患の患者で手術をしなきゃならなかった程の状態であったことを思い出しました。自分が腎臓疾患の患者だった事を忘れていました。

今では、風邪をひいても、インフルエンザにかかっても、あの迫力ある恐ろしい程の色と出血はありません。健康診断での血液検査の数値も普通です。

あの大騒ぎはなんだったのかな・・・？

結局、腎臓病だと思っていたのは幻で、本当は元々そんな病気は無かったのでは・・・・。それのあるある、そうさうだと権力と権威ある医者から言われ、(病院って病気があるある詐欺！？) また自分でもそう思い込み、自分で自分の病気を作り出してしまったのだなあと、そう思っています。

とは言え、私は自分自身の身体に無頓着でした。

若い頃から体力は人一倍ありましたから、無理な事でも多少程度ならやってしまう。明らかに無謀でも、それでも達成感を求めて体を酷使し、

俺はやり遂げたとか、立派だとか馬鹿な事をやっていました。

自分を追い込んで、自ら厳しい環境状況に身を投じ、孤軍奮闘する自分に酔っていました。それでも体が若く、肉体細胞の回復力や治癒力があるときは良かったかも知れませんが、激闘に次ぐ激闘の人生続きで、とっくに肉体細胞は悲鳴をあげていたのです。そんな悲鳴にも全く耳を貸さず、俺は！俺は！とやっていました。自分自身の肉体細胞にどれだけ冷たいかと言うことです。

腎臓疾患という、初めての大きなシグナルを得て、ようやく、本当によりやく自分の生き様の方向転換の途につきました。ですが、そう、まだ序の口です。自分の心の中には、今までの闘う生き方、自分の素晴らしさを表したい自分がまだまどうようよいます。全力で自分は正しい！間違ってるんかない！と絶叫しています。自分の根本を変えていく作業は一筋縄では行きません。実感としてあります。しかし、ここを変えていけない限り、もっと大きな病気などの現象が現れるであろうことも肌で感じています。

偽の自分を卒業して、本当の自分に出会う。人生の嘗てない物凄い課題です。

ですが、そのために生まれて来たのかなあ・・・と少しでも思う限り、やはりやり遂げなくてはならない自分に課した、人生の目的なのだと思います。

それがもし達成できたら、ありがとうしかない人生が開けるだろうとイメージ出来ます。
その時には、この腎臓疾患を改善してくれた松本先生や松本医院のスタッフさん達に対して、今思っているありがとうじゃなくて、心からの本物のありがとうが、きつと言えるところだと思います。勿論自分にも。

そうなった時、例え数行の短い手記でも、改めて投稿させていただきます。
というわけで、私の手記第一部を終わらせていただきます。

ありがとうございました。